

生物多様性と地域の社会と文化 — 「民俗知」を中心に

市川昌広（地球研）・小泉都（京大）・藤田 渡（地球研）・百瀬邦泰（愛媛大）（50 音順）

このグループでは、生物多様性を、それを基盤として形成される文化との連関という観点から論じ、両者を包含する議論の枠組みを模索する。その手がかりとして、生物多様性と人間とのインターフェイスとして機能する「民俗知」 — 自然との関わりから経験的に培われる知識 — に焦点を当て、生物多様性の文化創造機能、それを取り巻く現代の社会環境、新たな資源としての価値と利益分配の問題、といったトピックにつき、従来の議論の流れを整理し、今後行われるべき研究の方向性を示す。

1. 生物多様性が育む文化

生物多様性の基本概念を整理し、その保全の必要性について再検討する。その上で、「民俗知」の多様なあり方から、生物多様性の文化創造機能について検討する。さらに、そうした生物多様性により育まれた文化の下では、特に原生林に加え、二次林が豊富に残る場合、野生生物の利用が頻度依存的となり、また、原生林は、娯乐的、呪術的、非必須的(optional)利用になりやすいので、持続的になるのではないか。だとすれば、生物多様性に育まれた文化は、その基盤たる生物多様性を保全する、というフィードバックが成立する。この定式について、イバンヤプナンなどの事例を用いて議論し、頻度依存選択と多種共存という生態学理論を人による野生生物利用に拡張する可能性をさぐり、さらに精緻な検証のための研究の方向性を示す。

2. 現代世界のなかの森と人々

生物多様性の保全についての議論が進むなか、森林の近くにあつて、森林を使いながら暮らしてきた人々について、さまざまな位置づけがなされてきた。それらの議論は、地域住民を、あくまで生物多様性保全にとって有害か、無害か、あるいは有益か、という視点から、彼らの「伝統」 — 社会秩序や文化など — を、その部分部分を切り取って評価を下してきた。ここでは、そうではなく、彼らを、ごく自然に、そこに「生活する者」として捉えたらどうなるか、という発想の転換を模索する。「近代化」や市場経済化の影響を受けつつ、森林との関わりの中で、さまざまに戦略を立て、生活する。表面的には、「伝統的」社会や文化は、変容してしまったように見えるが、そこには、森林を使いながら暮らしてきた人としての「知恵」 — 「民俗知」の束 — を見出すことができるのではないか。サラワクはじめ、各地の事例を比較検討し、そうした生活者の「知恵」を含んだ、活きた生物多様性の保全の可能性を探る。

3. 遺伝資源と「民俗知」

地域の人々が持つ「民俗知」は、他方で、遺伝資源としての価値が注目されている。民族植物学者を中心に、企業による資源採取に対し、地域の人々の権利の擁護と利益の分配を求める声が 1980 年代後半より高まり、1992 年の生物多様性条約採択以降、さまざまな国際的取り決めにより、ルール作りが進んでいる。特に、「民俗知」の多くは集合的なもので、知的所有権保護の法的枠組みにそぐわないことが強調され、多様な地域社会のあり方に応じたそれぞれ個別の枠組みを、合意の上で作るべき、という *Sui generis* 原則についても概ねコンセンサスができています。しかし、知識の集団内の個人差、帰属する集団の特定・線引き、が困難であるという根本的な問題は、指摘はされながら、一向に議論が進んでいない。「民俗知」の事例から、所在と伝達についてのいくつかのパターンを見出し、それぞれのパターンに見合った利益分配の仕組みを構築することはできないか考える。